

滋賀県におけるスモン検診を補完する看護師・保健師による 全例面接調査の取り組みについて

廣田 伸之（市立大津市民病院 神経内科）
吉田 紀子（市立大津市民病院 神経内科）
山田 真人（市立大津市民病院 神経内科）
布留川 郁（市立大津市民病院 神経内科）
廣田 真理（市立大津市民病院 神経内科）

研究要旨

スモン患者の高齢化に伴いスモン検診の受診率が低下してきたため、滋賀県では平成 23 年度以降、県内の検診対象者 15～13 名に対して各所轄保健所職員の家庭訪問による直接面接によってスモン現状調査個人票のうち可能な項目についての調査を行ってきた。調査票回収率は 22 年度の 53% から、28、29 年度には 100% に達した一方で、医師による検診の受診率は 22 年度の 27% から 26 年度の 47% へ増加した後、29 年度には 31% へと漸減傾向にあった。減った原因としては病院での検診を希望するメンバーが固定していて、そのメンバーの体調悪化による入院検診の中止があった。平成 29 年度についてはスモン現状調査個人票の「B. 現在の身体状況」の各項目についての記入率を解析したところ、直接面接方式では a～x の 26 項目のうち、12 項目で十分な内容の記載が得られた一方で、握力計・音叉の道具や神経学的診察手技を必要とする診察項目での記入率が低かった。握力計・音叉などの診察道具を各保健所に配置する必要により、若干の記入率の向上の余地がある。

A. 研究目的

スモン患者の高齢化に伴い、スモン検診の受診率が低下し、検診制度の維持が困難となってきている。滋賀県では各所轄保健所職員による直接面接によりスモン現状調査票のうち可能な項目についての調査を行ってきたので、この取り組みの効果を分析した。

B. 研究方法

アンケート回収方式：平成 21～22 年度、京都スモンの会滋賀県支部を通じて現状調査票アンケートを郵送して回収および病院での検診を行った¹⁾。

直接面接方式：平成 23 年度～29 年度、滋賀県健康福祉部障害福祉課に依頼して各所轄保健所職員による直接面接にてスモン現状調査個人票のうち可能な項目について記入して回収し、希望者に対しては病院での

外来または入院での検診を行った^{2) 3)}。

両方式を通じて、調査票回収率・病院検診受診率の推移を調べた。調査票の前半部のうち「B. 現在の身体状況」には医師が診察しないと記載しにくい項目がある。平成 29 年度については「B. 現在の身体状況」の各項目 a～z について、記載なし 0 点、記載不十分 1 点、記載十分 2 点として評価し、その平均点を記入率として評価した。

C. 研究結果

調査票回収率はアンケート回収方式の 63% から、直接面接方式では 100% に達したが、病院での医師による検診率は平成 26 年度の 47% をピークとして、その後は漸減傾向にあり、平成 29 年度には 31% と低迷していた（図 1）。

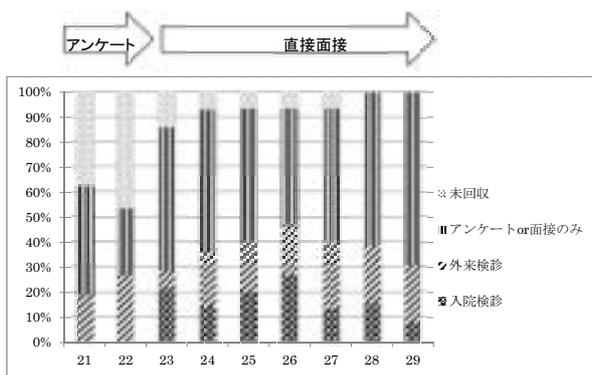


図1 調査票回収率とスモン検診受診率の推移

表1 スモン現状調査票個人票B項目の記入率

a	栄養	2.0
b	体格(身長・体重)	1.8
c	食欲	2.0
d	睡眠	2.0
e	視力	1.8
f	歩行	1.2
g	外出	1.8
h	起立位	1.4
i	下肢筋力低下	1.7
j	下肢痙縮	1.5
k	下肢筋萎縮	1.2
l	上肢運動障害	0.8
m	表在覚障害	1.2
n	下肢振動覚障害	0.6
o	異常知覚	1.0
p	上肢知覚障害	0.6
q	上肢深部腱反射	0.2
r	膝蓋腱反射	0.2
s	アキレス腱反射	0.2
t	Babinski 徴候	0.2
u	Clonus	0.2
v	自律神経症状	1.2
w	胃腸症状	1.5
x	身体的併発症	1.9
y	精神症候	1.7
z	診察時の障害度	1.5

スモン現状調査個人票の「B. 現在の身体状況」の各項目 a~z について、記載なし 0 点、記載不十分 1 点、記載十分 2 点として評価し、その平均点を記入率とした。

平成 29 年度の保健所職員による直接面接の対象者は女性 11 名、男性 2 名の計 13 名で、年齢の平均は 81.8 歳 (59~94 歳)、面接の場所は自宅 7 名、特養 4 名、グループホーム・保健所が各 1 名であった。直接面接方式でのスモン現状調査票 B 項目の記入率について解析したところ、a 栄養、b 体格 (身長・体重)、c 食欲、d 睡眠、e 視力、g 外出、i 下肢筋力低下、j

下肢痙縮、w 胃腸症状、x 身体的併発症、y 精神症候、z 診察時の障害度については平均 1.5 点以上であり、十分な記載が得られた。その一方で l 上肢運動障害、n 下肢振動覚障害、p 上肢知覚障害、q 上肢深部腱反射、r 膝蓋腱反射、s アキレス腱反射、t Babinski 徴候、u Clonus の記載率は平均 1.0 点未満と低かった (表 1)。

D. 考察

直接面接方式により調査票の回収率は 100% にまで達したが、病院での医師による検診率は 3 割程度に低迷していて、本来の医師による検診率の増加にはつなげていない。医師による検診率がいったん増加した後低下した原因としては、病院での検診を希望する患者 6 名が固定していて、そのうち 2 名の体調悪化による病院での検診の中止があった。これはスモン患者の高齢化が進行している現状では避けられない要因である。

その点、病院に来て検診を受ける代わりに、保健所職員の家庭訪問による直接面接でスモン現状調査票を作成することは、スモン患者の現状を把握するために、ますます重要な手段となってくると考えられる。

スモン現状調査票の「B. 現在の身体状況」については、保健所職員による直接面接方式でも a~x の 26 項目のうち 12 項目では十分な記載が得られた。その一方で 8 項目では半分未満の不十分な内容の記載しか得られなかった。これらの項目には握力計・音叉などの道具や神経学的診察手技を必要とするものがあった。医師による診察手技が必要な項目については難しいとしても、握力計・音叉などの診察道具を保健所に配置することにより、これらの項目の記入率の向上の余地がある。

E. 結論

高齢化が進んで ADL が低下し、検診会場への移動が困難となったスモン患者の現状を把握するためには、保健所職員の家庭訪問による直接面接方式が有効と言える。握力計・音叉などの診察道具を各保健所に配置することにより、スモン現状調査個人票の「B. 現在の身体状況」の項目の記入率の向上を図る余地がある。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 園部正信ほか：滋賀県における平成 21 年度のスモン患者検診，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班 平成 21 年度総括・分担研究報告書，p 73-75, 2010
- 2) 園部正信ほか：滋賀県におけるスモン現状調査：行政との連携による調査票回収率向上と入院診療により QOL 向上が得られた 3 例，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班 平成 23 年度総括・分担研究報告書，p 65-68, 2012
- 3) 廣田伸之ほか：滋賀県におけるスモン検診の現状について，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班 平成 27 年度総括・分担研究報告書，p 108-110, 2016

滋賀県健康医療福祉部障害福祉課、大津市保健所、草津保健所、東近江保健所、彦根保健所の皆様のご協力に感謝いたします。